

私と大阪文学学校

中塚鞠子

大阪文学学校（以後文校）と出会ったのは、遠い昔のことだ。まだ独身だった。結婚相手が大阪に来たので、仕方なく仕事をやめて、東京から大阪に来たばかりだった。「街で道を尋ねたら、お巡りさんまで大阪弁なのよ」と、当たり前のこととを大阪への不満・違和感として友人への手紙に書いた覚えがある。学生時代には文芸部で雑誌「レゾナンス」を創ったり、勤めてからは社内新聞の編集などをしていった。それらをみんな捨ててきていた。結婚が出発点になるとは思えなかった。さあ、結婚してなにをする？

仕事を探して大阪府庁の試験を受け、業務課に入り麻葉取締員になった。文校をどこで知ったか記憶にない。文校が借りていた教職員会館は府庁の近くに在り、私は仕事帰りに歩いて行けた。やっとなにかに辿り着けそうな気がした。

事務局長は松岡昭宏さんで、事務局員として現在チューターの日野範之さんがおられた。当時、ベトナム戦争は泥沼の状態を呈していた。五月一日のメーデーはものすごい人だった。メーデーはいつから無くなったのだろうか。

記憶はおぼろげだが、週一回か二回講義があつて、月に一

回実作の合評会があつたような気がする。そして、本科は前期が詩のコースで後期が小説コースだったと思う。研究科は一年間だった。

実作のチュウターは本科の時は右原彪さんで、研究科になると倉橋健一さんだった。

講義の講師陣は、いま思えばなんと豪華な、というメンバーであつた。先ず小野十三郎校長が自ら講義を行っていた。最初の講義は大関松三郎の『山芋』から「虫けら」の話だった。初心者向けのリアリズムの詩だ。その頃は素直に感動した。

私はただの本好きの理系の学生だった。当時の文学者などほとんど知らなかつたので、ただぼーっと話を聞いていたのであるが、いま思えば記憶しているだけでも貴重な人たちであつた。「知的生産の技術」の梅棹忠夫、子どもの詩「キリン」の足立巻一、ブレヒトの野村修、ジャコメッティの矢内原伊作、片桐ユズル、片山昭彦、港野喜代子、井上俊夫、などいろいろな分野の方々の方々の講演が聞かれた。

多分、文校が活気に満ち、盛り上がりつつ来ている時期であつたと思う。歌声運動や綴り方教室、労働運動、ベトナム反

戦運動などが盛んであった。私鉄のストライキがよくあった。電車が止まって、トラックの荷台に乗って出勤したこともあった時代である。

同期に滝本明さんがいた。一級上に、高島寛さん、速水智也子さん、山田克也さん、森沢友日子さん、などがいた。芝充世さんも輝いていた。いまはおとなしいおばあさんになっているが、ストリートのような長い髪をなびかせて、台に立ち、シユプレヒコールのような詩を朗読していた芝充世さんは、チャーミングで可愛かった。「公開銃殺」という詩を書いている。私が入学したのは一九六五年。前年新幹線が開通し、十月には華々しくオリンピックが東京で開催されていた。しかし、文校からの帰り道、梅田の地下街はまだ薄暗く、子連れの女のものもらいが蹲っていたり、何か書いたものを首にぶら下げて詩集を売っている人がいたりした。

この年十一月、第一回の文学集会が大阪市立労働会館で開かれた。この集会是小野十三郎校長の基調報告で「現代の状況と文学——ベトナムと私、私と大阪」で始まった。

小野校長は自作の詩「雲も水も」を読んだ。

雲も 水も

木々の芽ぶきも

それをながめるとき

われらのねがいの

なんと異なること

一つとしてつながらぬさまさまなおもい

花ひらく野に出ても

敵は敵

この「花ひらく野に出ても 敵は敵」というフレーズはこの時から五十数年、今でも私の中にやきついている。

その後速水智也子の「こうしてはいられない」という詩に曲がつけられ合唱団が唄った。この歌も激化したベトナム戦争を憂う詩で、「こうしてはいられない／こうしてはいられない／／ まず／カカトのとれた／べた靴をはくことから／それから／しばらく／花を忘れ：」という詩で、無力感、焦燥感が共感と呼んだものであろう。

この集会で第二回大阪文学学校賞がおくられている。記憶が確かでない私は今、松岡昭宏氏の『森の宮群像』を参考にしているのだが、この時「小説部門の伊豆田寛子」「向日葵」に、文学学校賞と小野十三郎『試論＋続詩論＋想像力』が小野十三郎校長から、在校生の青井鞠子（私の旧姓）と沢田登美子から花一輪と学校バッチ、卒業生を代表して村田拓が花二輪と書籍を贈り受賞を祝った」とある。当時小さな赤い方向を示したような学校のバッチがあった。前進を意味した。

第二回文学集会は「花ひらく野に出ても敵は敵」、第三回は「私を悲しまないで下さい 組織してください」、第四回は「幻視せよ、日常の荒野」、第五回「時代閉塞の現状とわれらの文学表現」と続けられていく。この集会はいったい何を創出しようとするのか、という問いを抱えながら、と松岡昭宏氏は書く。タイトルをみるといかに時代を映しているとい

う感じを受ける。

文学集会は今も学生委員会主導で続いている。学生たちが一堂に集まって楽しい交流する場を持っている感じである。

私は折角入学したのだからと、とりあえず、人見知りなのを克服するためにも、積極的に学生委員会の仕事を引き受けた。当時、学生委員会は『いぶき』という冊子を出していた。学校が発行していたのは『新文学』である。創刊号は一九六三年八月である。『森の宮群像』によると

青井鞆子が『新文学』六九年七月号「文学学校と私」にジャコメッティを話す矢内原伊作のことを書いている。パリのこと。ジャコメッティは矢内原さんの顔を二ヶ月半というもの一日も休むことなく、描いては消し、消しては描いた。翌年も七月にジャコメッティから飛行機の切符を送って来た。今度も一カ月半、一日も休まず、一日中、廃屋の物置小屋のようなアトリエで、矢内原さんは不動の姿勢を続け、ジャコメッティは描いては消し、消しては描いたのである。矢内原さんは「現実は無限に深く無限に豊かであるから真実に到達したということはありません」と、昼の労働の疲れで彼女はいつ眠ってしまったのか、何度目をさましてもジャコメッティの苦闘を語り続けているのだ。

私は多分六五年〜六七年くらいまでしか通学していなかったと思う。それ以後の数年が一番文校が華やかなころだったのではないかと思う。三人の名物不良中年（金さん・倉橋

さん・松原さん）がいた時代である。

結婚して子どもが生まれて、その後数年、私は生活に専念していた。子どもが小学校に入ったところから午前中病院の薬剤師をやり、午後は自分の自由な活動の時間に取り、地域で現代文学を学ぶグループ「若葉」を創ったり、図書館友の会活動で「詩の教室」「文章教室」などを創っていった。その時に倉橋健一さんの下で本を読み詩やエッセイを書いてきた。それらは今も四十年近く続いている。

文校から離れてしばらくしてからのこと、「長谷川龍生の詩の特別講座」というのを手伝ったことがある。日氏賞を取る詩人を創る、という冗談交じりの特別講座だった。当時の龍生さんは冴えていた。あいにく誰も日氏賞は取らなかったが、学校賞に輝いたりする優秀な人たちが集まっていて、私には大変勉強になった。

第一詩集を出した時、葉を書いて下さったのが、長谷川龍生さんと倉橋健一さんだった。文校のチューターに推薦して下さったのも龍生さんだった。眼を掛けていただき大変お世話になった。

文校は「在校生相互、講師（チューターを含む）」と在校生のそれぞれの個性が交流し、対立し、連帯するというダイナミックな関係の中でこそ学校活動は爆発力を持つことができていると思う。私はチューターという名を頂きながら、今も勉強させていただいている。